

プログラム 3 : 国際シンポジウム

1 シンポジウムのテーマ

「世界自然遺産を引き継ぎ生かす・共生と循環の理念」

2 シンポジウムの趣旨・目的

地球環境危機の時代、文化と科学が共鳴しあう新たな環境倫理の下でのパラダイムシフトに日本の世界自然遺産が果たし得る役割を問います。

- 世界自然遺産に登録された日本の5地域は、相互の連携によって自然遺産の価値と日本型自然保護システムを国内外に発信するとともに、共通の地域課題に取り組み、各地域の持続的発展を図ることを目的に、「世界自然遺産5地域会議」を発足させている。

5地域会議が掲げる「日本型自然保護」とは、日本的自然観に基づく共生と循環の考え方であり、それぞれの地域には自然保護と暮らしを両立させる独自の工夫や知恵が環境文化として息づいている。

- 地球環境危機が深刻化する中、これらの「日本型自然保護」は、東洋の知として世界からも注目され始めている。

東洋の知と西洋の知を融合させ、文化と科学が共鳴しあう新たな環境倫理を創り出していくこと、そしてそのために世界自然遺産が果たし得る役割について、国内外の識者が世界に向けて議論する。

3 開催日時

令和7年6月5日（木）16:30～18:00

4 登壇者

時間	役職等	紹介
山極 壽一	人類学・霊長類学者 総合地球環境学研究所長 京都大学名誉教授	京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科長・理学部長を経て、2020年まで第26代京都大学総長。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長、日本学術会議会長を歴任。
小野寺 浩	世界自然遺産5地域会議代表 公益財団法人屋久島環境文化財団 理事長	1973年環境省（当時環境庁）に入庁。自然環境局長などを歴任。自然再生法、外来種法の新規立法や自然公園法の改正などに多数従事。屋久島や奄美群島を世界自然遺産登録へと導いた。
西村 明	宗教学・文化資源学者 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授 公益財団法人国際宗教研究所常務理事	近現代日本社会における宗教や死者の存在、そこから派生して環境や地域文化にも焦点をあてた研究を行う。近年では日本の南西諸島も含めた太平洋諸島・東南アジア島嶼域にも関心を寄せている。
ラマン・スクマール Raman Sukumar	生態学者 インド科学研究所生態学センター名誉教授	2006年（第14回）コスモス国際賞受賞者。象の生態学的、動物行動学的な研究成果を踏まえて、象と人間との共存のための多くの手法を開発。アジア各国の数多くの野生生物保護プログラムに関わる。
カレン・B・ストライア Karen B Strier	人類学者 ウィスコンシン大学マディソン校教授	元国際霊長類学会の会長で、ブラジルの霊長類研究の権威。ブラジル東部のムリキ（クモザルの一種）に焦点を当て、霊長類種の生息地が縮小し重複するなかで、種間の行動の変化や個体群の存続可能性について研究。ブラジルに研究室を持つ。

※総司会：有働 由美子も議論に参加予定。